もの言う牧師のエッセー　第７４話　　震災２周年
④「 福島への帰還なし 」

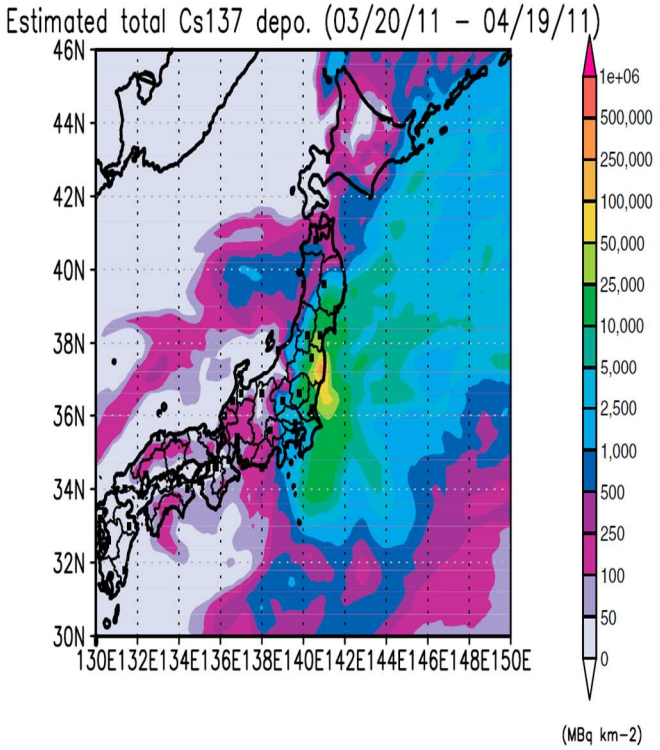
福島原発は廃炉までに４０年以上かかることは既に知られるとおりだが、今年１月の仕事始めの日に福島県双葉町の井戸川町長が故郷への帰還目標を語り、「暫定的に３０年後にする」と発言し、帰郷を望む町民の間に波紋を広げたのみならず、日本中に衝撃が走った。「３０年」の根拠はセシウム１３７の半減期が約３０年であるからである。１号機の爆発時に大量の放射性物質を浴びてしまい、今も鼻血が止まらないという井戸川氏は、「チェルノブイリ事故の避難基準は年間５ミリシーベルト、それと比べても格段に高いのが私たちの双葉町だった」と話す。

チェルノブイリ事故の際もソ連当局は当初「避難区域は３０km 圏内」などと言っていたが、結局のところ汚染区域は２００ｋｍ、３００ｋｍと広がり最終的には７００ｋｍの彼方まで拡大、焦った政府はそれらの地域住民を全て避難せようとするも、国家としてその負担に耐え切れずついにソ連国家そのものが崩壊してしまった。要するに故郷帰還どころの話ではないのだ。

今この時にも恐るべき放射性物質が噴出し続ける中、ドイツ IPPNW（核戦争防止国際医師会議）のヨルク・シュミット博士らが来日、「 福島、宮城、栃木、茨城 県民は避難必要、首都圏も汚染している！」と訴えれば、 欧州放射線リスク委員会（ECRR）クリス・バズビー博士も「 福島原発から 100 キロ圏内に人を住まわせ続けさせる日本政府は犯罪的なほど無責任。このままでは東日本全体が廃墟になってしまう！」と警鐘を鳴らす。　　聖書は言う。

「彼らは、私の民の娘の傷を手軽にいやし、平安がないのに『平安だ、平安だ。』と言っている。彼らは忌み嫌うべきことをして、恥を見ただろうか。彼らは少しも恥じず、恥じることも知らない。だから彼らは、倒れる者の中に倒れ、彼らの刑罰の時、よろめき倒れる。」

エレミヤ書８章 11-12 節

と。これは今から 2600 年前、神に背を向け滅亡間近のイスラエルに、神が発した警告だが、妙に今の日本に重なってしまう。東北の人々の苦悩をよそに、今の日本は、アベノミクスの円

安や株高と目先の銭勘定に忙しく、復興どころか原発再稼動ありきでひた走る。今はただ、いつか日本人が神に立ち返り、心の底から悔い改め、復興をなしとげ、人々の故郷への帰還を成し遂げることを、心から祈るものである。　　2013-4-7